

誘惑

(2)

地図にない場所というのは、区劃整理上のミスファイケイションとか住居表示変更の際のケイオスなどといったものではない。また所蔵の地図が不備だというわけでもない。もちろん実在する場所が明記されていないというのは地図としての最大の欠陥だが、それはこの地図に限ったことではない。というより、完全無欠を標榜するなら、そのような地図は世界中のどこを捜してみてもあるはずがないのだ。だが、地図が実在している土地を明示することを放棄しているとき、それは地図を空想した贗物でしかない。現にこれから行こうとしている場所は、誰もが知っている場所なのに、いかに精密で權威のある地図にも載っていないのだ。

一般に女性、というよりも少女たちは暦に関して独特の畏敬の念を持っている。それも初心な少女ほど暦の下で困惑する。それから幾年か経た後には、多情な女ほど暦と親しくなる。だが、自らの失策で痛い目にあいはじめると暦を憎むようになる。パーのマグム連が客とのデートの刻限に遅れるというのは、そのような憎しみの現われなのかも知れない。もつとも、女は自らの失敗を棚に上げて強くなつてゆく。

疾りつづけると街燈がますます揺れはじめた。その街燈に貼ってある緑色の住居表示標を調べるだけで時が奪われる。息切れ、眩暈。だが、それよりも、闇の中を電信柱相手にうろついていることに、ある不審と不気味さを感じていた。騙されているのではないかという、品性の下劣さを窺わしめるような言葉もつい出てしまう。けれども、あの電話の声——そのときにはもう魂の誘惑と名づけていた——を思い返すと、そのような想いがいかにもみすばらしく思え、改めて胸を張り、ついでにネクタイを糺してみるのだった。

指定の場所に到着したのは約束の刻限を大幅に超過してからである。実は我慢できずにタクシーを拾ったのだが……。その住所をいうと運転手は、それじゃああの辺ですな、といったきり一言も口を利かずに走りつづけた。ルームミラーを介してその男の顔を見ようとしたが、驚いたことに、そこに映っているのは深い闇と後ろに走り過ぎる街の燈ばかりであった。車は迷路のような露地を何遍も曲ったあげく、面倒臭そうにタイヤの音を軋ませて停った。

この辺ですよきつと、と運転手は語尾を濁してこちらを振り返った。そのとき帽子の下に見えたものは、それをいうのが憚られるような類のものであった。ざりとて猥褻でもなんでもありはしない、ただそんなことをいいだす者の精神状態が疑われる性質のものにすぎない。世の中に魑魅魍魎の類など数限りないし、それほど気にかからなかったのだが、一瞬怯む隙を衝いて、車はパツクし、料金も取らずに走り去ってしまったのである。

だが、この袋小路がその場所であるのに間違いはなかった。なぜなら、電燈の壊れたこの電信柱にはあの緑色のプレートがついていないからだ。

(3) 闇を拒もうとするのか、あるいはそれ自体が闇そのものであるとでもいうのか、何の装飾もない冷たいコンクリートの壁に漆黒の鉄扉が貼りついていて、それともごくつまらない小さな家屋であるのか、それさえわからない、建物の輪郭は夜の色に溶けている。扉にはありうべきはずのノックカーも把手も見当らず、さりながら自働式のものでもないようであった。振り向いてみると、いまのまま夜夜の都会の喧騒がもたらす妖しい光や蒼々とした月の光を浴び、ピロードの照り返しのよう

に並んでいた屋根屋根も、また露地の曲り角も、夜闇にすっかり溶け込んで、そこには何もなかったのである。不吉な想いの正鵠さがここに証明されたのだろうか。

ところで、そのような得体の知れない不安のうちには囚われて、何故目前の扉だけが確かなもののような印象を受けたのかというならば、それは闇の中で宙吊り状態でありながら、両の足で踏みしめている大地だけはしっかりと体を支え、そしてなによりも鉄扉そのものの色合いがいかにも深々とした暗黒の色であったからだ。

しようことなくそのきわめて暗い方向に向けて、電話の場所はここでしょうかと頼りなげな声にして唾いてみた。すると、前に倒れたものか、それとも後ろに引かれたものか、何処かに吸い込まれてしまったのか、あれほど夜そのものであった扉が消えてしまったのである。

替りに現われたのは、なくなつた扉の形に浮かんだ灰白い空洞だった。惹き寄せられるようにその灰白い入口に入ろうとすると、すぐ右側に黒ずくめの蝙蝠めいた男が立っているのに気がついた。その男の背が高かつたせいもあるが、ちやうど右足から入りかけていたため気配に気づいて右側を振り仰いだときは、ひどくあわててしまった。そのうえ男の顔がただの黒い影にしか見えぬに至ってはなおさらだった。何もいわれたわけではないが、そのとき、後ろの間に戻れと意思表示されてもいるような圧迫感すら覚えた。男の表情はいささかも判然としなかつたのだが、見えない眸からはそのような威圧する力が発せられていたようだ。

電話で女の方に招かれたのですが、それははたして自宅のことでしょうか、見当違いだったならば酔払いの謔言か狂人の寝言としか思われぬような唐突な訊ね方をして後悔していた。電信柱に對する確信の一件からすると、自分でも辻褃の合わぬ後悔のしようであるとも考えた。蝙蝠男はではお待ちを、と、世の中にこれほどの低音があらうかと思われるほどのほどと聞き取れぬ声音を残すと、奥の、さらに灰白い光の暈の中に消えていった。

ほどもなく、蝙蝠男は一向にその顔を現わすことなく光の影になって舞い戻り、くるりと廻転して、背の高い復せた後姿についてくるようにとの慇懃な仕種を見せた。廊下は全体がそれ自身で発光しているような印象を与えたが、蝙蝠男に邪魔されている向こうからの光がどの面にも均等に当たり、一様の反射の仕方をしているのだろう、多角形の寶石にみられる反射光のありようである。

永遠の／果てしない野に／夢みる／睡蓮よ／現在に／あざめるな／寶石の限りない／眠りのように
(西脇順三郎「寶石の眠り」)

歩くにつれて蝙蝠男の影の輪郭から洩れる光の強度が増していった。背の高い男の暗黒が光源に向かうにしたがい薄割れはじめ、次第に透き通るようになっていった。あまりに脆い光と影との境界がゆるやかにゆるみおけると、たつたまままで先導していたはずの男の背中が消え失せていて、替りに眩い光自体が輪郭を結びだし、ガラスの裸体をもつ女が、いつのまにかこちらを見つめている。乳房が光とともに揺れているのがわかった。

(4)
軽い会釈をよこした女の青い瞳がかすかに笑っているのに気づいたころには、透明な裸体だと思われたのが嘘のように、絹のイヴニングドレスに身を包んだ女が美しい腕を差し伸べていた。あなたが電話の方でしょうか、あの優雅なアルトをなまめかしい女の姿態に重ねながら訊ねたが、期待とは異なって、女は澄んだソプラノで答えた。いいえ違います、けれどお招きしたのは私です、電話をしたのは妹でしょう、妹がその仕事をいたしておりますから。女はこともなげにそういうと、ホールへと誘った。仕事——、その仕事とは何のことでしょうか。いささか間の悪い間い方をしたものの、女は細い鼻を少し上向きにして、あら何をいいたされるのでしょうか、そんなわかりきったこと、そういつてさっさとホールに入ってしまったのである。

ホールの中は白みがかつたような淡い光で満たされていた。喧騒というほどではないが、多くの紳士淑女が上品な身装をして行き交っている。なにやら外国の賭博場にでも来たような雰囲気であった。

そもそも中二階なのか、あるいは天井から吊り下げられているのか、中空に舞台があつて、そこで一人の女が踊っていた。踊りは佳境を迎えているようだった。

細い糸のようなスポットライトの光が煙の罩もる空気の装を射通して、ステージの一点を鮮やかに照らしていた。パロック風の、繊細な、それでいて畳みかけるような旋律が静かに流れている。フットライトが徐々に光度を増していった。褐色のセロファンが貼りつけてあるのだろうか、退嬰的な淡い光の束が幾度となく舞台を舐め廻している。

気の遠くなるような幻惑の装置の中で、ダンスの体は流れていた。流れているとしかいえないような微細な曲線を歩いているのである。エキセントリックな、弦楽器の病的な喘ぎが聞こえ始めると、ダンスは片足の爪先の一点に体重を注ぎ小刻みにふるえだした。猝猛な嵐に逆らつて、蒼穹を翹け抜けるような肉の振動。緋色の、縫目のない薄い衣裳のふるえが、なによりもその筋肉の闘いを伝えている。

ダンスの体が栗鼠のように小さくなつていった。どこまで縮んでいくのだろうか。ついに舞台上の一点の赤い滴となつて、そして……。そして次の瞬間、白い貌だけがきわだつて印象的に、深い苦悩の皺を泛べて巨大化した。ダンスの瘦せた白い貌につややかな凝脂が漲っている。

沁み入るような音楽が、そのとき破綻をきたした。女の体を包んでいた真紅のドレスが勢いよく四方に拡がり、炎のように燃え上がった。静止していたかに見えた体が独楽のように、三角形に広げられた赤い布の下端を支点にしてぐるぐる廻転を始めたのである。凄じい速度でティンパニが叩かれた。聴覚に対する殴打。女は宙に躍つた。四肢をいっばいに広げる。白い肌を眼を射

る。宙にありながら激しくターンした。

女の、眉のない、異様にのっぺりとした表情の中に、舞台の、シヨアの、すべてが吸い取られ、強烈なライトの洪水の中で、布を介して透き通る白い体が、みるみる光沢を生じていくのだった。関節と関節がどのような方法で折り畳まれるのしよう、いや、まるで骨という骨が関節という接点に吸い込まれているようでしたな。人間は脆いものです、魂も脆いが肉体はもっと脆い、その脆さがあの見事なターンを可能にしたのです。私、ひとときも目を離せなかつたわ、あそこではすべてが一致していたのですもの、どんな細部も看過することはできなかつた、精神と肉体が、そうですとも、思想と技術とが同じ高みにあつたのですわ、それはまさしく、ただ一瞬の跳躍——。さまざまな囁きの中に知り合いの声も混っていたようだったが、人々の顔はなぜか見定めがたかつた。それでも、あちこちのテーブルの上に投げ出されたままのカードの、スーツと絵札の肖像は鮮明に見てとれたのである。

(5)

もちろん偶然適中することはある。それはあくまでも偶然であつてそれ以外の何物でもない——。

(稀谷雪「術」)

卵の内部を模して造られたホルルの中央にルーレットの台があつた。その周りに集まる人は数少ないのだが、それでも彼らはひどく熱中している様子だった。楕円形のテーブルそのものは白い大理石でできていたのだが、賭台の三十六までの数字が記された部分にはそれぞれ異なつた色の薄い水晶の板が嵌め込まれていた。また、ルーレットの文字盤の仕切りの中も水晶かダイヤモンドでできているようだった。テーブルの周縁部には雪花石膏でも貼りめぐらしているのか、そこだけ粉を吹いたように見え、ゲームに参加している人たちが真赤な液体の入つたりキュールグラ

スを置いている。先ほどの女主人がいつのまに持ってきたのか、きらきら光る空のリキニールグラスを差し出し、耳許で鈴のような声を鳴らして、あのルーレットは一風変わっているのです、賭ける場所は三十六までの数字のうちの一つだけで、それ以外は認められません、まったく胴元のためだけに、そのようなルーレットですよ、まあ、見ていてごらんささい、そういうと愛らしい唇を結んで、いたずらな仕種で空のグラスに接吻した。

いわれるままにルーレットを見つめると、廻転盤がひとりでに廻りはじめ、同時に人々の溜息がホールに響いた。廻転する数字のあたりから、虹のような幾種類もの色彩を持つ光が筋になって宇宙に送ったのである。光は空中の一点で焦点を結ぶようにも思われたが、紫、金色、赤、緑、薄い青色……とめまぐるしく旋廻し、絡み合い、錯綜し、とりとめもない乱舞になっていた。そして賭台の水晶板の数字からも色のついた光の帯が四方八方へと放たれ、もの凄く速度で動き始めると、ホール全体があらゆる色の光の粒子によって翻弄され、洪水に遭遇したかのようにある。

もちろんホールの中の紳士淑女のすべてが椅子から立ち上がり、この見事な光景を見つめていた。けれども、心を奪われている様子はありありとしていても、一樣に、どこかもの寂しげな雰囲気

が漂っていた。ほどなく光の渦の廻転が緩やかになり、動きの中心に一種類の色が現われ、それが橙、藍色、ピンク、黄色という具合に順次変わってゆき、銀色の光のところで動きを停めると、それきり光の変化は見られなかった。賭台の中からも、同じように銀色の光だけが天井に向かってまっすぐ伸びていた。ルーレット盤から発せられた方の光は傾きをもっていたため、賭台から伸びている光と交錯していたのだが、中空のそのあたりが血の色を帯びているように感じたのは錯覚だったのか

も知れない。

テーブルの周りにいた人々の中には賭けに勝った者は誰もいなかったらしく、皆、すごすごとその場から離れ、賭台の上には空になったリキエールグラスだけが残されていた。

素晴らしいルーレットですね、素晴らしいながら少しく暗に落ちぬところがあつたので、ハンドラーはいないのですか、そういうえば賭金もチップも見当たりませんね、皆さん、あれほどうちしおれているというのに……、沈んだ様子の女の深い憂いがこもった瞳を見つめて呟いてみた。

ハンドラーは必要ないのです、そしてこのルーレットにはお金など賭けないのです、賭けているものにお気づきになりませんこと、そういうと女はグラスを目の高さに掲げた。このお酒、そうです、このお酒を賭けているのです、空のグラスが酒で満たされているかのように附け加えた。

そうか、そういうわけか、それで負けるとグラスが空になるのか、そう考えると無性に嬉しくなつた。それでそのお酒はよほど強いのでしょうか、私はアルコールには自信があるのですが、ひとつ銘柄をお聞きしたいものです、招待客に酒を振舞う趣向なのかと納得したのである。

そうではないのです、あなたは思い違いをなすつてらっしゃる、……あのグラスに入っていた真赤な液体は夢なのです、皆さん、ご自分の夢を賭けてらっしゃるのですわ。

なんですって、夢ですと——、なるほど夢を賭けるとはうまい比喩ですね、たしかにそれは男のロマンというものだ、面白い、では私も遊ばせてもらいましょうか。

よろしいのですか、負けると夢が減っていくのですよ、女は気にかかることをいったが、好奇心には勝てなかった。

どうすればこの空のグラスに夢を注いでいただけるのでしょうか、先ほどからの疑問を口に出してみた。

あの雪花石膏の上にこのグラスを置くのです、そして見つめてみると、じきにグラスの中に夢の